

図49 II層上面発掘区全域図・割付図

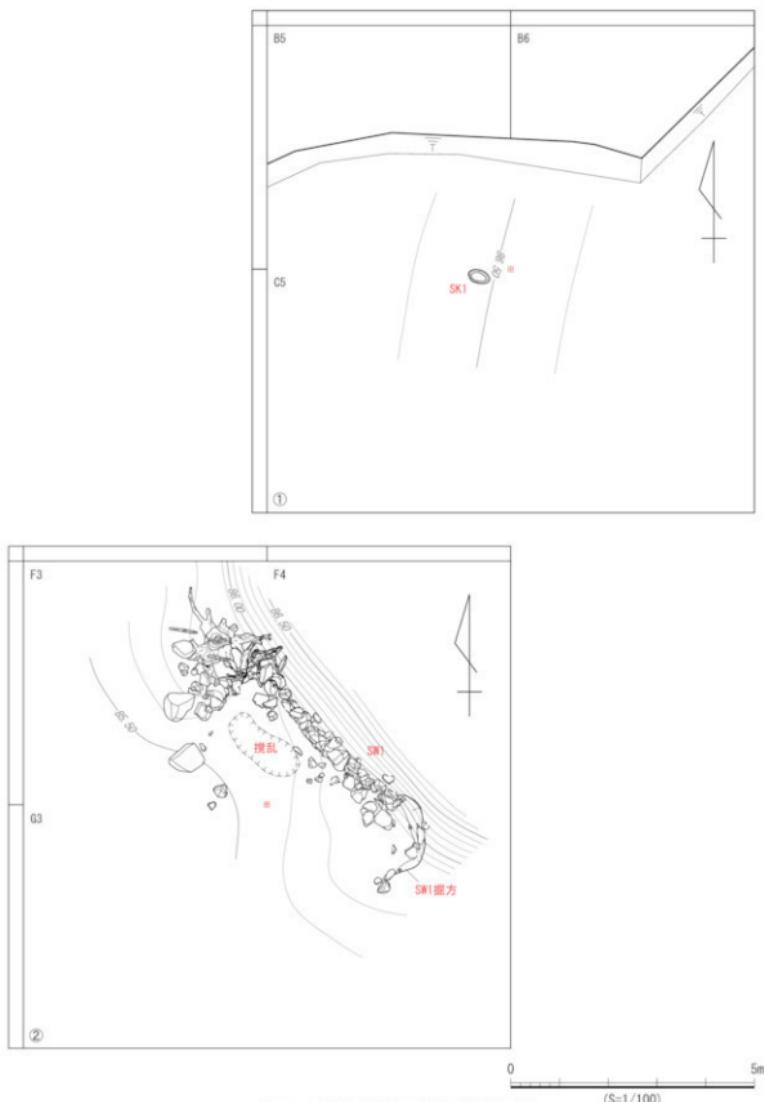


図50 II層上面発掘区全域図分割図①②

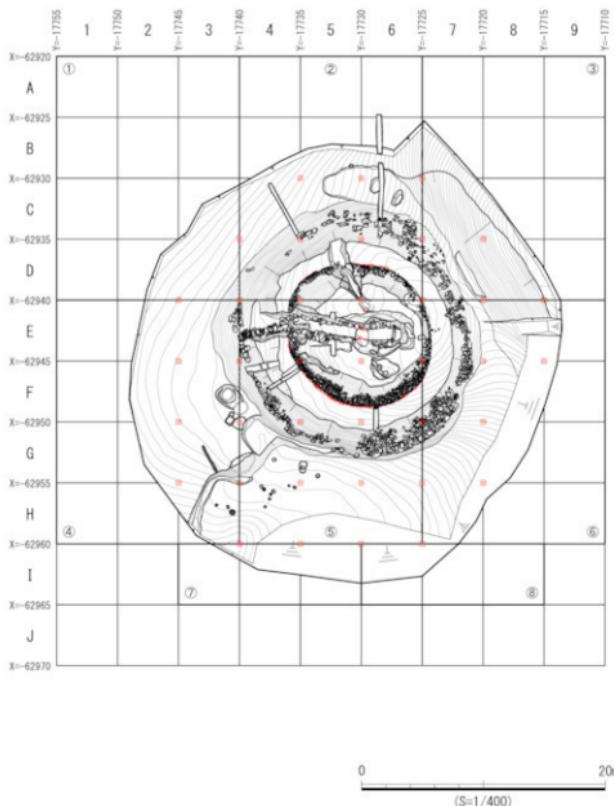


図51 III層上面発掘区全域図・割付図

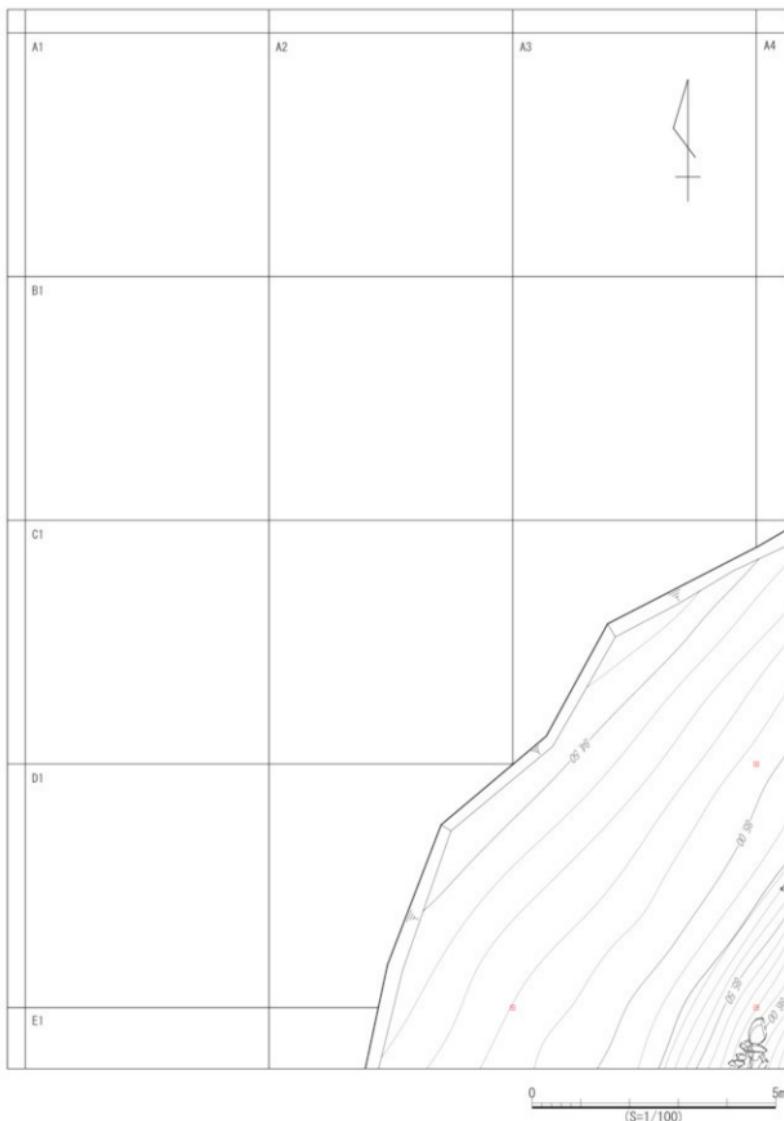


図52 III層上面発掘区全域図分割図①

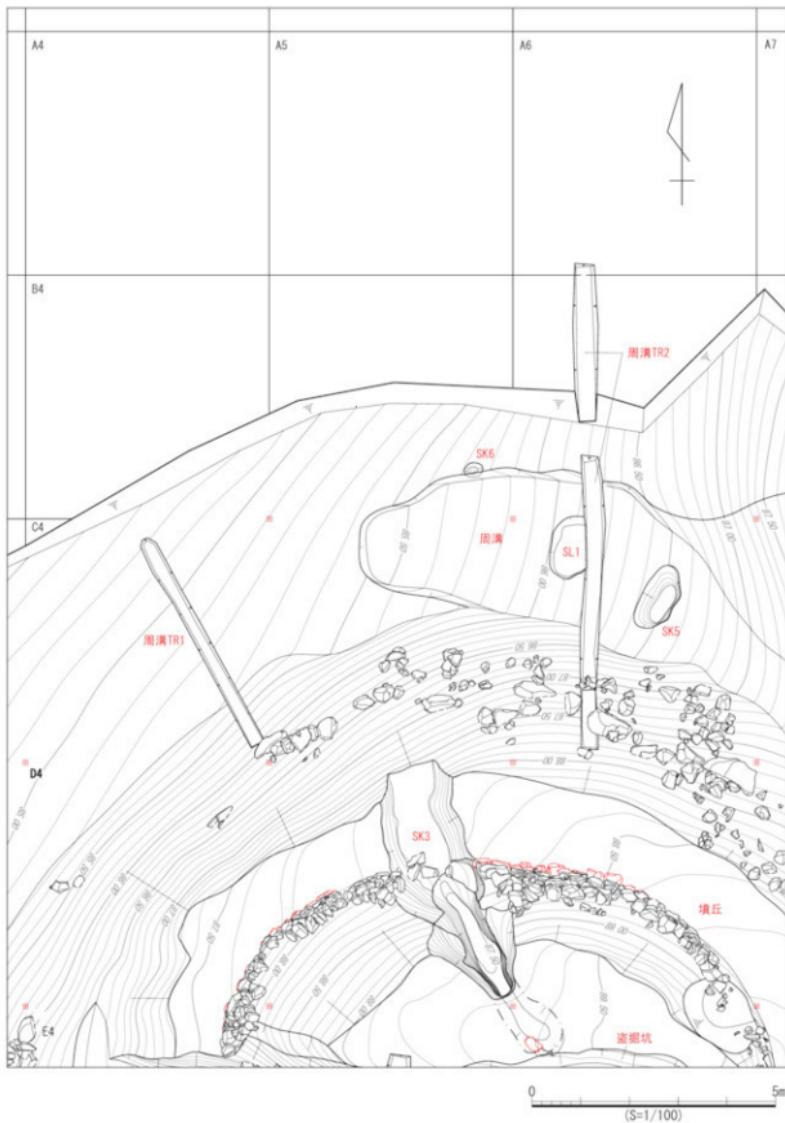


図53 III層上面発掘区全図分割図②

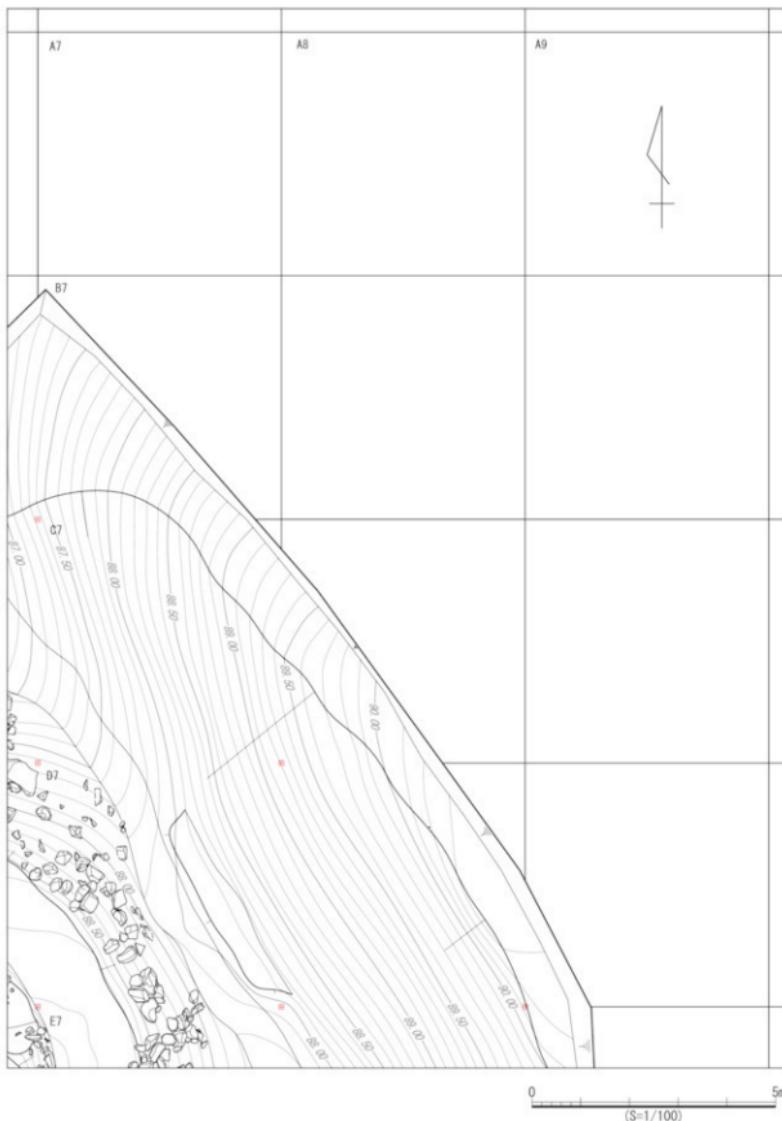


図54 III層上面発掘区全域図分割図③

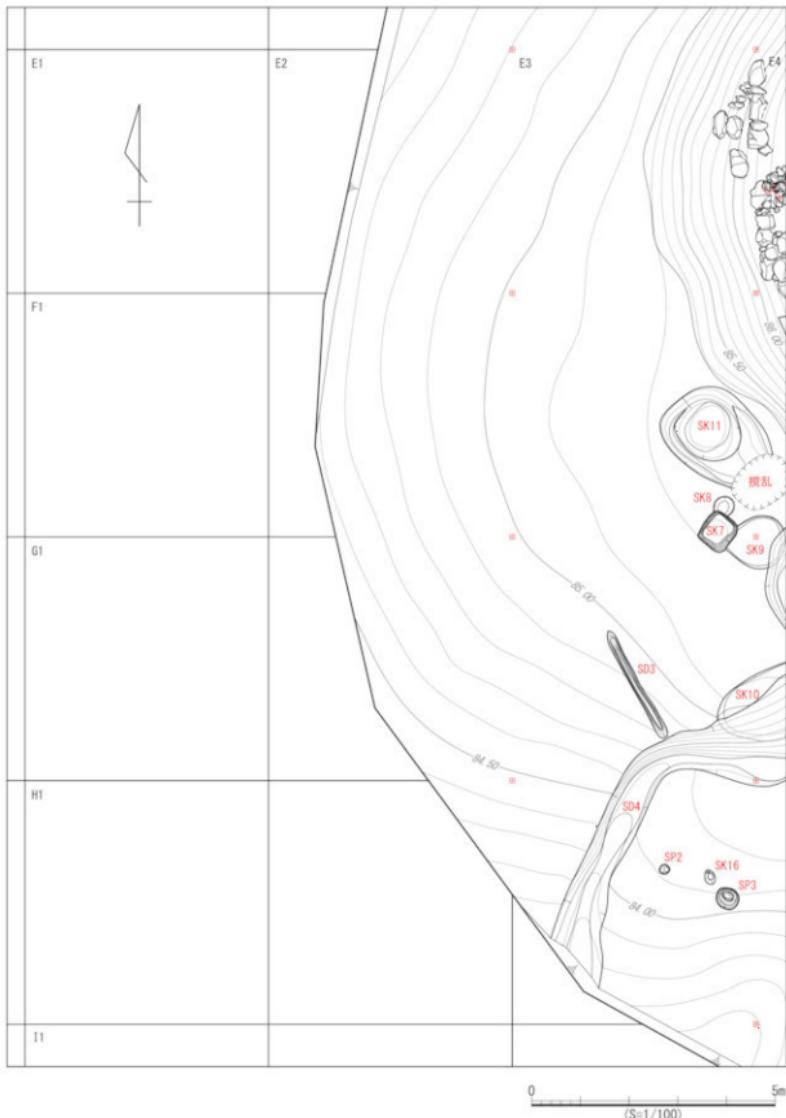


図55 Ⅲ層上面発掘区全域図分割図④

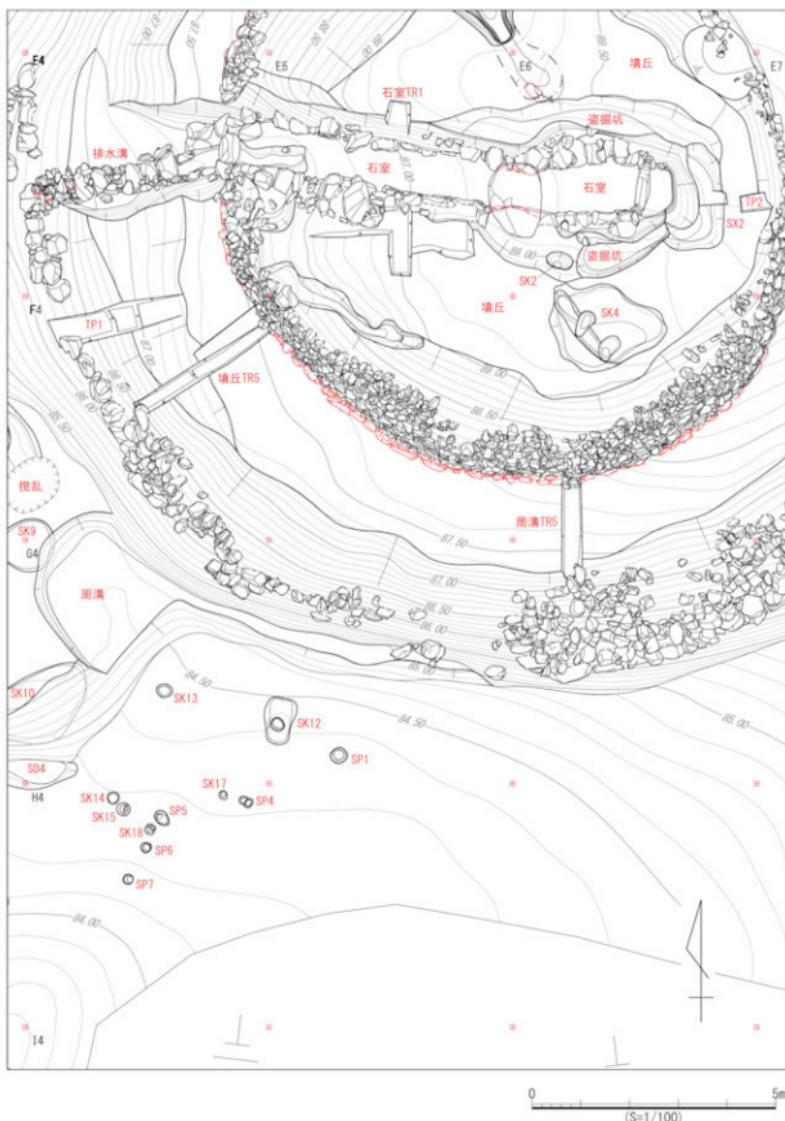


図56 III層上面発掘区全域図分割図⑤

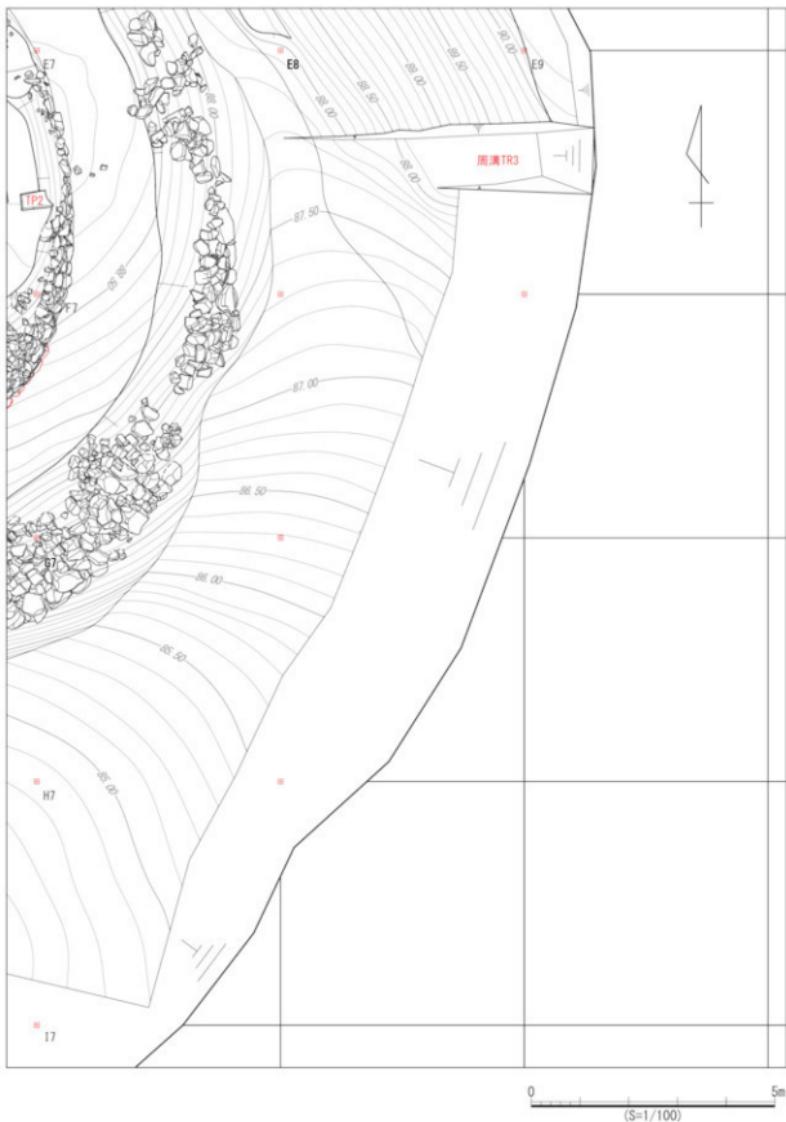
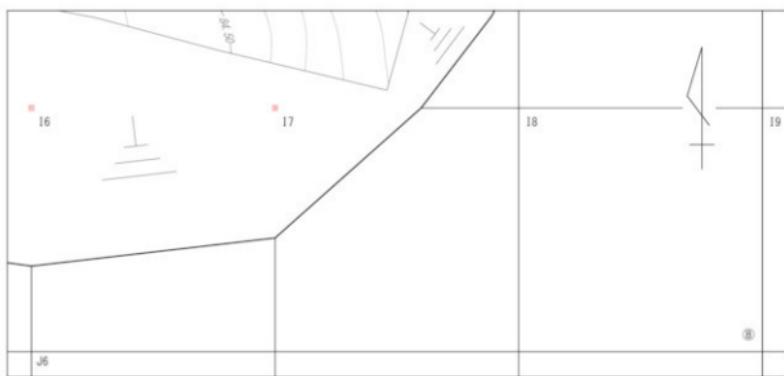
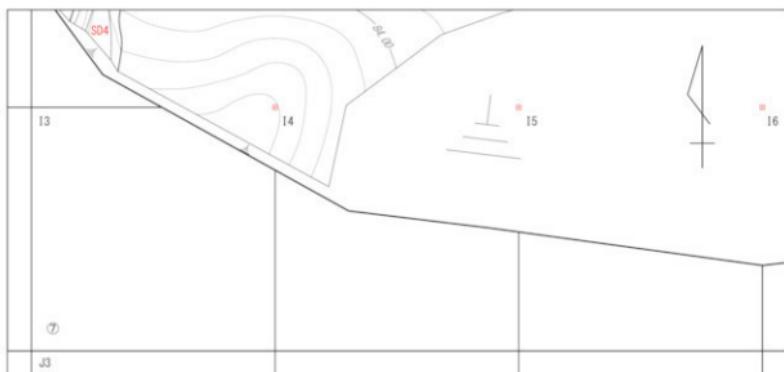


図57 III層上面発掘区全域図分割図⑥



0
(S=1/100) 5m

図58 III層上面発掘区全域図分割図⑦⑧

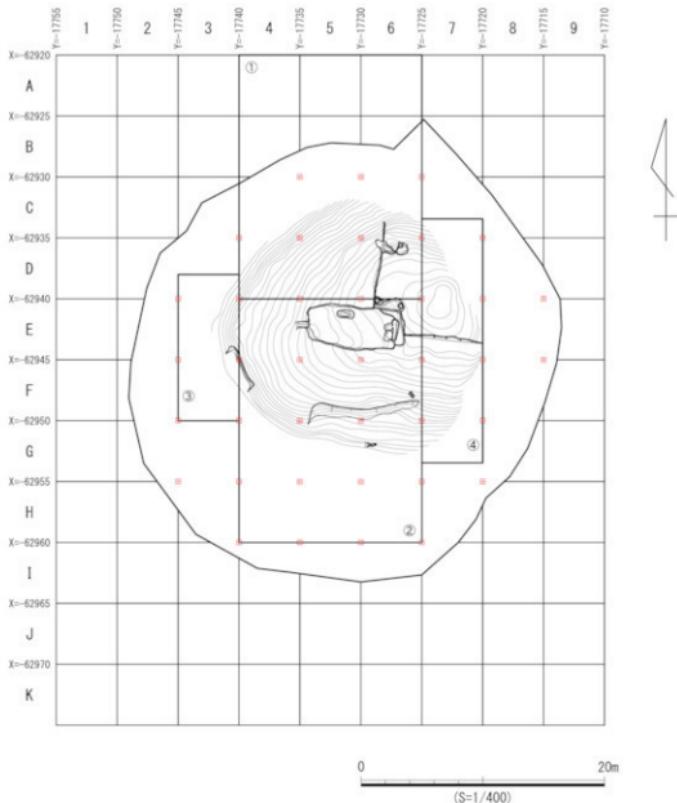


図59 填丘下発掘区全域図・割付図

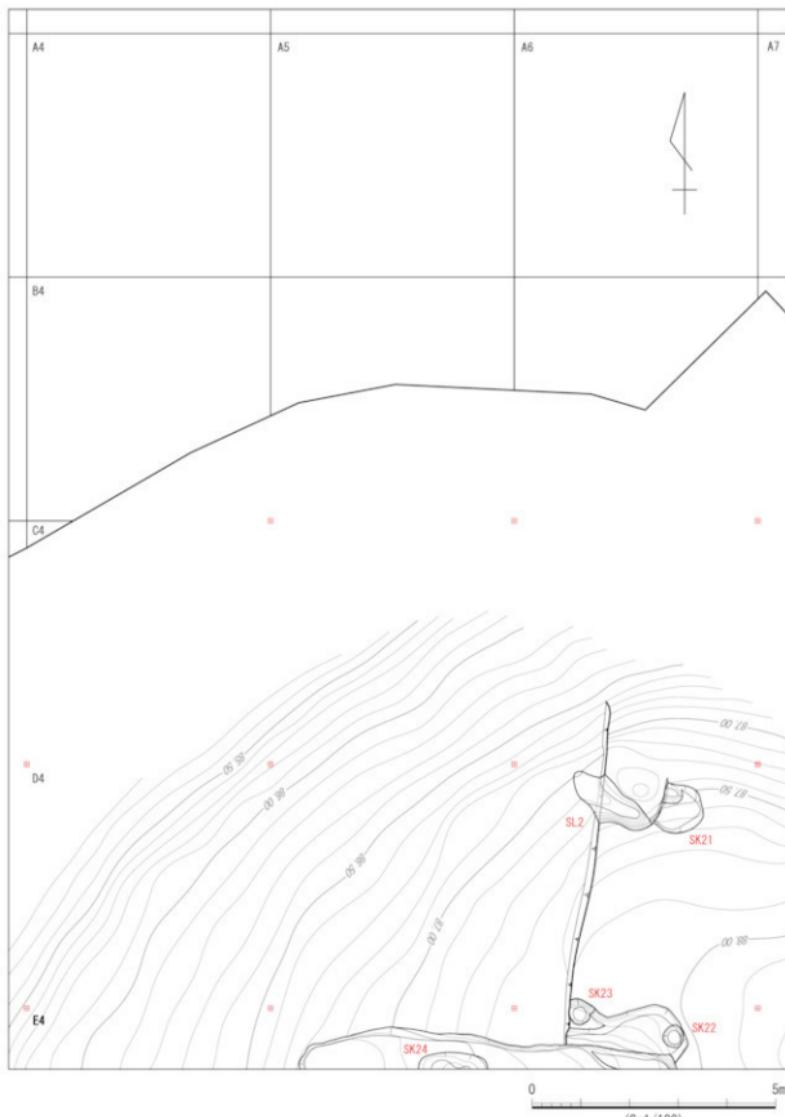


図60 填丘下発掘区全域図分割図①

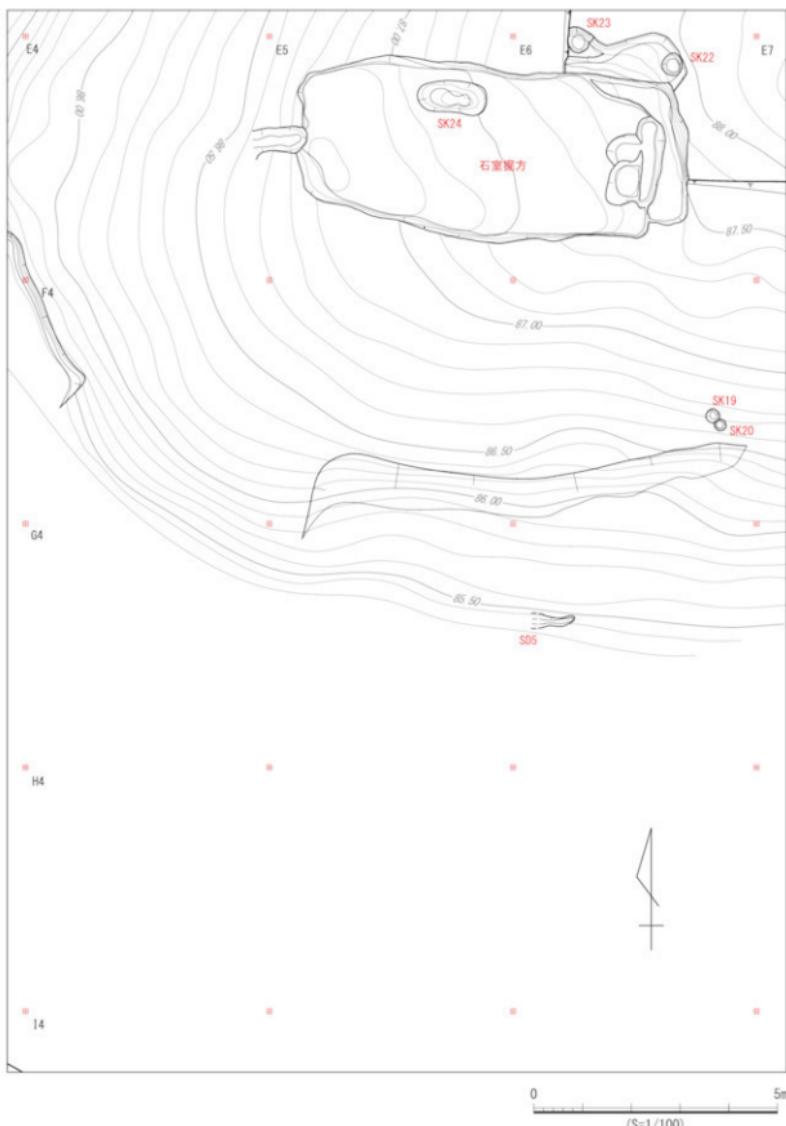


図61 填丘下発掘区全域図分割図②

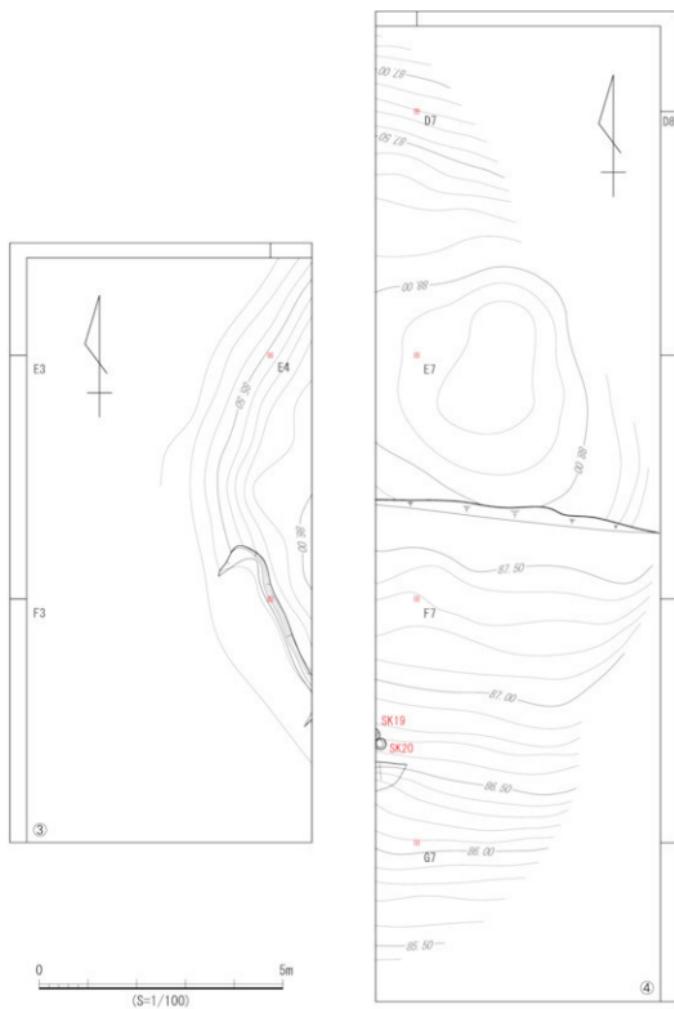


図62 填丘下発掘区全域図分割図③④

第4章 自然科学分析

第1節 分析の概要

本節では、次節に記載する自然科学分析を実施した経緯と、結果の概要及び考察を述べる。

1 SL 2・SK24 出土炭化材の放射性炭素年代測定（第2節）

古墳の埴丘解体の際に、埴丘下及び石室掘方底面から被熱遺構（SL 2）と焼土を伴う土坑（SK24）を検出した。SL 2は埴丘下から検出した遺構である。検出当初、埴丘土層の観察から古墳築造に関わる遺構と考えていた。しかし、底面や壁面が非常に良く焼けており、炭化物が多量に出土するなど特徴的な様相をもつていてことや、今回の調査で遺物包含層などから縄文土器や石器も出土しており、当該遺構が縄文時代である可能性も考えられた。当遺構の性格が、埴丘築造手順の理解や埴丘築造以前の状況に関わることから、SL 2出土の炭化物について、放射性炭素年代測定を行った。SK24は石室掘方底面で検出した遺構である。平面形は楕円形を呈し、明確な被熱痕は見られなかったが、まとまった炭化物と焼土が出土した。石室貼床下の掘方底面から検出したことや、石室主軸と遺構の長軸が同じ方向であることから、石室構築前に何らかの目的で火を使った行為が行われた可能性がある一方、SL 2と同様、縄文時代の遺構の可能性も考えられることから、放射性炭素年代測定を行った。

分析の結果、SL 2とSK24は、縄文時代早期前葉の年代であることが判明した。SL 2は、土坑の形状や焼土・被熱の位置から、縄文時代早期の煙道付炉穴である可能性が高い（第3章5節参照）。

第2節 SL 2・SK24 出土炭化材の放射性炭素年代測定

1はじめに

当遺跡から検出した試料について、加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を行った。分析は小林克也（株式会社パレオ・ラボ）が担当した。

2 試料と方法

試料は、6世紀前半と考えられる古墳の盛土の下から検出された焼土土坑であるSL 2から出土した炭化材1点（取上番号2656：PLD-25823）と、同じく古墳の石室掘方の底面から検出された焼土土坑であるSK24から出土した炭化材2点（取上番号2654：PLD-26596・取上番号2655：PLD-26597）の、計3点である。樹種はいずれもクリである。測定試料の情報、調製データは表19のとおりである。

表19 測定試料及び処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-25823	遺構：SL 2 試料No.サンプルC 取上番号2656	種類：炭化材（クリ） 試料の性状：最終形成年輪 部位：外側4年輪分 状態：wet	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N）
PLD-26596	遺構：SK24① 試料No.サンプルC 取上番号2654	種類：炭化材（クリ） 試料の性状：最終形成年輪以外 部位：外側4年輪分 状態：wet	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N）
PLD-26597	遺構：SK24② 試料No.サンプルC 取上番号2655	種類：炭化材（クリ） 試料の性状：最終形成年輪以外 部位：外側4年輪分 状態：wet	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N）

試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクト AMS：NEC 製 1.5D）を用いて測定した。得られた ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行った後、 ^{14}C 年代、曆年年代を算出した。

3 結果

表 20 に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比 ($\delta^{13}\text{C}$)、同位体分別効果の補正を行って曆年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した ^{14}C 年代を、図 63 に曆年較正結果をそれぞれ示す。曆年較正に用いた年代値は下 1 術を丸めていない値であり、今後曆年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて曆年較正を行うために記載した。

^{14}C 年代は AD1950 年を基点にして何年前かを示した年代である。 ^{14}C 年代 (yrBP) の算出には、 ^{14}C の半減期として Libby の半減期 5,568 年を使用した。また、付記した ^{14}C 年代誤差 ($\pm 1\sigma$) は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の ^{14}C 年代がその ^{14}C 年代誤差内に入る確率が 68.2% であることを示す。

なお、曆年較正の詳細は以下のとおりである。

曆年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が 5,568 年として算出された ^{14}C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、および半減期の違い (^{14}C の半減期 5,730 \pm 40 年) を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C 年代の曆年較正には 0xCal4.1 (較正曲線データ : IntCal13) を使用した。なお、 1σ 曆年年代範囲は、0xCal1 の確率法を使用して算出された ^{14}C 年代誤差に相当する 68.2% 信頼限界の曆年年代範囲であり、同様に 2σ 曆年年代範囲は 95.4% 信頼限界の曆年年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に曆年年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布を示し、二重曲線は曆年較正曲線を示す。

表20 放射性炭素年代測定及び曆年較正の結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	曆年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を曆年年代に較正した年代範囲	
				1σ 曆年年代範囲	2σ 曆年年代範囲
PLD-25823 SL 2 取上番号 2656	-27.68 \pm 0.31	9503 \pm 30	9505 \pm 30	9109BC (9.3%) 9086BC 9039BC (2.8%) 9032BC 8837BC (56.1%) 8751BC	9120BC (29.7%) 9005BC 8916BC (1.9%) 8900BC 8867BC (63.7%) 8721BC
PLD-26596 SK24① 取上番号 2654	-27.61 \pm 0.19	9494 \pm 32	9495 \pm 30	9108BC (6.4%) 9088BC 8836BC (61.8%) 8740BC	9119BC (23.1%) 9006BC 8915BC (1.3%) 8901BC 8862BC (70.0%) 8706BC 8669BC (1.0%) 8657BC
PLD-26597 SK24② 取上番号 2655	-28.43 \pm 0.17	9489 \pm 31	9490 \pm 30	9096BC (1.4%) 9091BC 8834BC (66.8%) 8732BC	9118BC (9.5%) 9067BC 9061BC (9.0%) 9010BC 8913BC (0.7%) 8904BC 8848BC (75.1%) 8704BC 8672BC (1.8%) 8654BC

4 考察

SL 2 の取上番号 2656 (PLD-25823) は、 ^{14}C 年代が 9,505 \pm 30 yr BP、 2σ 曆年年代範囲 (確率 95.4%) は、9,120–9,005 cal BC(29.7%)、8,916–8,900 cal BC(1.9%)、8,867–8,721 cal BC(63.7%) を示した。SL 3 の取上番号 2654 (PLD-26596) は、 ^{14}C 年代が 9,495 \pm 30 yr BP、 2σ 曆年年代範囲は、9,119–9,006 cal BC(23.1%)、8,915–8,901 cal BC(1.3%)、8,862–8,706 cal BC(70.0%)、8,669–8,657 cal BC(1.0%) を示した。同じく SK24 の取上番号 2655 (PLD-26597) は、 ^{14}C 年代が 9,490 \pm 30 yr BP、 2σ 曆年年代範囲は、9,118–9,067 cal BC(9.5%)、9,061–9,010 cal BC(8.3%)、8,913–8,904 cal BC(0.7%)、8,848–8,704 cal BC(75.1%)、8,672–8,654 cal BC(1.8%) を示した。

これらは小林（2008）、工藤（2012）、矢野（2008）を参照すると、いずれも縄文時代早期前葉に相当する。試料は古墳築造時の祭祀跡、または縄文時代早期の炉跡の可能性が考えられていたが、測定結果により SL2 および SK24 の時期は縄文時代早期前葉であることが確認できた。

参考文献

- Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. *Radiocarbon*, 51(1), 337–360.
- 小林謙一（2008）縄文時代の暦年代. 小杉康・谷口康浩・西田泰民・水ノ江和同・矢野健一編「縄文時代の考古学2 歴史のものさし」：257–269, 同成社.
- 工藤雄一郎（2012）旧石器・縄文時代の環境文化史—高精度放射性炭素年代測定と考古学-. 373p, 神泉社.
- 中村俊夫（2000）放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の¹⁴C 年代編集委員会編「日本先史時代の¹⁴C 年代」：3–20, 日本第四紀学会.
- Reimer, P.J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Haflidason, H., Hajdas, I., Hatte, C., Heaton, T.J., Hoffmann, D.L., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., Manning, S.W., Niu, M., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Staff, R.A., Turney, C.S.M., and van der Plicht, J. (2013) IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0–50,000 Years cal BP. *Radiocarbon*, 55(4), 1869–1887.
- 矢野健一（2008）押型文系土器（大川式・神宮寺式土器）. 小林達雄編「総覧縄文土器」：154–161, アム・プロモーション.

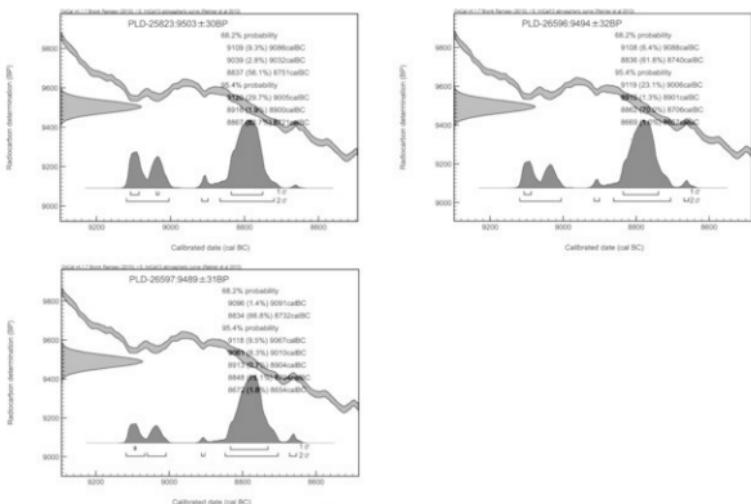


図63 歴年較正結果

第5章 総括

第1節 墳丘の構築工程について

今回の調査では、墳丘断面の観察によって墳丘の構築工程が明らかとなった。第3章第3節で大別した土層をA～Iで図示し(図64)、工程順を示した(図65)。墳丘の構築工程について以下に詳細を記述する。

第1段階 墳丘を構築する場所を選定する段階である。墳丘は、北東から南西に延びる尾根上を選地して構築されている。東西方向の断面観察による旧表土を復元すると、尾根上は約8°の傾斜が認められる(図22)。傾斜はなだらかであり、小高い場所に墳丘を築くのに適している。尾根筋はそれほど広くなく、平坦に近い面の幅は6～7mである。また、基盤が砂岩風化層であるため掘削しやすく、チャート基盤の各務原山地などと比較して構築は容易である。さらに、石材は郷部山の基盤と考えられることから、運搬が容易であったことも選地の理由の一つと考えられる。

第2段階(A・B・C・C') 玄室の壁を支える盛土を行う段階である。始めに周辺を野焼きし、石室掘方を掘削する。残存する旧表土の状況から、掘方の掘削は周囲を整地することなく行われ、掘削排土は掘方の周囲におかれたと思われる。石室掘方の両外側にあるAの堆積がその名残で、最終的には掘方の上端となっている。次に掘方に土をいれて整地し、奥壁の大型石材と玄室側壁の基底石を並べる(B)。基底石の中にはこの整地土(貼床)に若干埋まっているものもみられることから、整地と石材の設置は同時並行で行われたと考えられる。奥壁の設置に関しては足場となる段が作られた可能性がある(第3章第3節参照)。その後、石の積上げに移る。床面が西に向かって傾斜しているため、基底石もそれに準じて低くなってしまっており、両側壁ではそれを補正する調整をほぼ北側の石室掘方の高さまで行っている(第3章第3節参照)。なお、北側の石室掘方が2段になっているが、先に述べたように石材搬入時の足場となる段である可能性が考えられ、工程Cにおいて裏込めを入れると同時に埋め戻している。次に天井石を架設する高さまで奥壁・側壁上部を構築し、それを支える盛土をする(C')。石室掘方の上端より上層は、側壁の石材から斜めに下がる堆積が観察されることから、石材を積み上げながら盛土したこと示している。この工程C'を経て、玄室を内包した小丘状の盛土が形成されたと考えられる。なお、この小丘状の盛土の周囲に旧表土が残ることから、用いられた土砂は、石室掘方の掘削排土が主体であった可能性がある。また、南側ではAの堆積が切られていることから、この部分の土砂も用いられた可能性がある。

第3段階(D・D'・E・E') 墳丘2段目を構築する段階である。第2段階で形成された小丘状の盛土を拡幅するように盛土を行う(D)。この盛土は水平方向の堆積が目立つ。墳丘端部側が後の工程によって切られているため残存しないが、工程Dによって緩斜面をつくり、天井石を引き上げるスロープとした可能性がある。また、工程Dの盛土は、周溝の掘削土も利用したと思われる。天井石の設置後、天井石を盛土で被覆する(D')。天井石の周囲は雨水の侵入を防ぐため粘土質であった可能性があるが、調査段階では失われていた。次に工程D・D'で形成された盛土にさらに土を盛り上げる(E・E')。墳頂部の盛土E'は天井石の封土の上をさらに盛土したことを想定して作図した。工程Dで形成された緩斜面を端部から順に削平して、その土を上部に盛土したと考えられる。さらに、現状でテラスの下になっている削平部分からも土砂を供給した可能性がある。端部の削平によって形成された墳丘の裾部は、南北断面で計測す

ると、石室の中心からほぼ等距離（約6m）に位置し、計画的な造成を裏付けている。この結果、塙丘2段目が完成し、見た目には直径約12mの円墳状になっていたと考えられる。

第4段階（F・G・H・I） 塙丘1段目の構築と葺石の敷設を行う段階である。塙丘1段目（テラス部分）は、工程Eによって生じた削平部分を埋没させるように築かれている（F）。一旦2段目の葺石の基底石下まで盛り上げており、葺石を敷設するための準備作業にもなっていたと考えられる（F南側）。Dの堆積と同様に水平な堆積が目立つことから、掘削部分の幅を基準にして規模を確定して盛土したと考えられる。葺石は1・2段目ともに盛土と葺石を交互に置きながら積み上げたとみられる（G・H）が、南斜面の一段目葺石においては、3段階に分けてテラスを拡幅しつつ施工している。G・Hの先後関係は土層から確認はできないが、Fの敷設は2段目葺石の構築準備と考えられること、Hの盛土は2段目葺石基底部を埋め殺す構造であることから、葺石は2段目から敷設した可能性が高い。最後にテラスの傾斜を均し平坦面の形状を整えるためにテラス上面を整地し（I）、さらに2段目葺石の基底石が埋め殺されたと考えられる。用いられた土砂は、塙丘南側のテラス部分に谷部分の黒褐色系の土が多く用いられていることから、前段階よりさらに広範囲から集められたと考えられる。

以上のように、第3段階の結果構築された小丘状の盛土に直径12mという規格があり、そのまま塙丘2段目となっていることや、第3段階において土取りで生じた削平による平坦地を第4段階のテラスの造成に利用していることなど、古墳造成前から2段築成の円墳の構築を企図して計画的に造成されている可能性がある。可児市稻荷塙1・2号墳は、梅替古墳より後出する古墳であるが、旧表土や基盤層と塙丘の関係が類似している（第5章第2節参照）。このことは、2段築成の古墳を造成する際、当該地域において伝統的に同じ手法が用いられた可能性を示していると思われる。

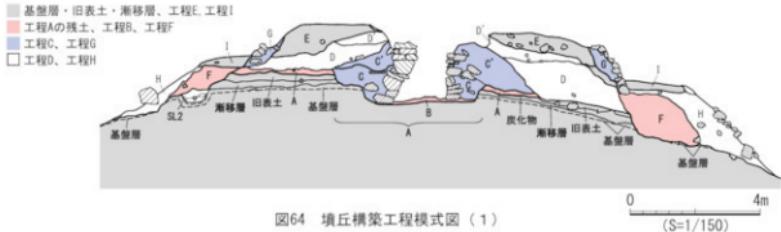


図64 塙丘構築工程模式図（1）

表21 塙丘の構築工程

段階	工程	内容
第1段階 遷地	—	地質・地形などの条件が良い。西方向に眺望が広がる。 野焼きを行い、整地せず石室掘方を掘削する。
第2段階 玄室の構築に伴う盛土	A	貼床の敷設と基底石の設置は同時進行で行う。礫床は敷設しない。
	B	玄室壁の積み上げに伴い盛土する。水平方向の堆積。
	C・C'	天井石の高さまで玄室壁を積み上げるのに伴い盛土する。斜め方向の堆積。
第3段階 塙丘2段目の構築	D	塙丘を拡幅する。天井石引き上げのためのスロープを造る。水平方向の堆積。
	D'	天井石を設置し、天井石を覆う盛土をする。
	E・E'	直径12mの範囲で裾部を削平し、その排土で塙頂部を盛る。
第4段階 塙丘1段目の構築 葺石の敷設	F	塙丘2段目の裾部に盛土を行い、テラス基底部を構築する。水平方向の堆積。
	G	土を充填しながら2段目葺石を敷設する。
	H	1段目葺石を敷設する。南側はテラスを拡幅して葺石を敷設する。
	I	テラス上を整地する。2段目の葺石基底部が埋め殺される。

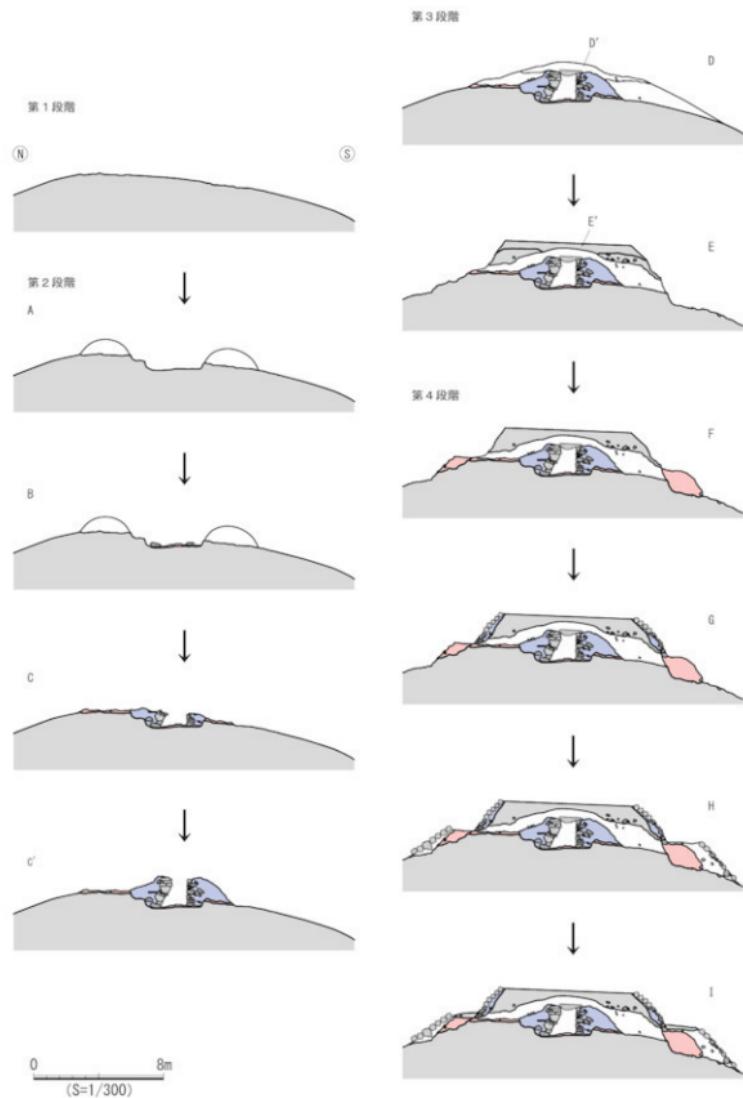


図65 填丘構築工程模式図（2）

第2節 梅替古墳の位置付け

梅替古墳は、年代が美濃地域の後期古墳でも古い様相を示すこと、単独墳であることなどいくつかの特徴がみられる。改めてまとめるとともに周辺の古墳と比較し、当該地域における梅替古墳の位置付けについて言及する。

1 古墳の築造年代（初葬時期）と追葬時期

築造年代と追葬時期について出土した須恵器から検討する¹⁾。出土須恵器の最も古いものはH11号窯式期（1）に属し、最も新しいものは那加5号窯式期（53）に属する。それぞれ5世紀末、7世紀末に位置付けられる。しかし、これらの年代に属する須恵器はそれぞれ1点にとどまることや、供獻土器とされる須恵器の性格から、これらをもって古墳の築造と最後の追葬の時期と確定するのは困難である。そこで、同時期の須恵器をまとめて須恵器群とすると、大きく5時期に分けられる（表22）。

表22 梅替古墳出土須恵器の様相

時期	段階	須恵器編年	年代	産地	主な器種	点数
1期	初葬	H61号窯式期（新）	6世紀前葉	尾張	壺身・壺蓋	10
2期	追葬1	蝮ヶ池窯式期	6世紀中葉	尾張	壺身・壺蓋・高壺	7
3期	追葬2	TK43号窯式期	6世紀後葉	畿内	壺身・壺蓋・高壺・広口壺 脚付壺・大型甕	23
4期	追葬3	TK209～217号窯式期 H44・H15号窯式期	6世紀末～ 7世紀初頭	畿内 尾張	碗・高壺・甕・提瓶	24
5期	追葬4	須衛65号窯式期	7世紀中葉	美濃須衛	壺身・壺蓋・短脚高壺・甕	5

1期は、H61号窯式期（新）である。古墳の築造及び初葬の時期と考えられ、6世紀前葉に位置付けられる。2期は蝮ヶ池窯式期（6世紀中葉）で1回目の追葬時期、3期はTK43号窯式期（6世紀後葉）で2回目の追葬時期と考えられる。3期の須恵器は、出土状況から大型甕や脚付壺が墓道やテラス付近に置かれたことを示すことから（第3章第3節参照）、石室外でそれらを用いた葬送に伴う儀礼が行われた可能性が高い。須恵器の大型甕が出土する古墳の類例は可児・加茂・各務原地域に散見され²⁾、この地域の特色の一つである可能性もある。4期はTK209～217号窯式期（6世紀末～7世紀初頭）で、3回目の追葬時期と考えられる。器種組成に、甕や瓶類が新たに加わる。5期は、須衛65号窯式期（7世紀中葉）で、最後の追葬の時期と考えられ、美濃須衛産の須恵器を使用しているのが特徴である。

以上のように梅替古墳は、6世紀前半に築造されるとともに初葬が行われたと考えられ、美濃地方における横穴式石室の導入期に位置付けることができる。また、初葬が行われた後、約1世紀半の長期にわたり4回の追葬が行われたと想定できる。

2 梅替古墳の特異性

梅替古墳は、西側に展開する深糠地区の平坦地を見渡すことができる尾根上に単独で立地する。同時期の美濃地域の後期古墳が山麓に群集墳を形成するのが一般的である³⁾のに対し、当古墳は孤立した立地条件にあるといえる。墳丘は2段築成で葺石を敷設し、葺石基底部を埋め殺寸構造をもつ。葺石基底部を埋め殺寸特徴は、稻荷塚1・2号墳⁴⁾や次郎兵衛塚1号墳⁴⁾（いずれも可児市）の葺石構造にみられる。両古墳とも6世紀末の築造であり、梅替古墳よりも後出である。稻荷塚1・2号墳（図66）は、石室を被覆

する2段目墳丘を形成する時点で周囲の基盤層を削平し、削平した平坦面上に1段目墳丘を形成する点が、梅替古墳の構築方法と類似する。葺石基底部を埋め殺す構造は、県内では可児地域に数例しか認められないことから、梅替古墳を初現としてこの地域で受け継がれた可能性も考えられる。

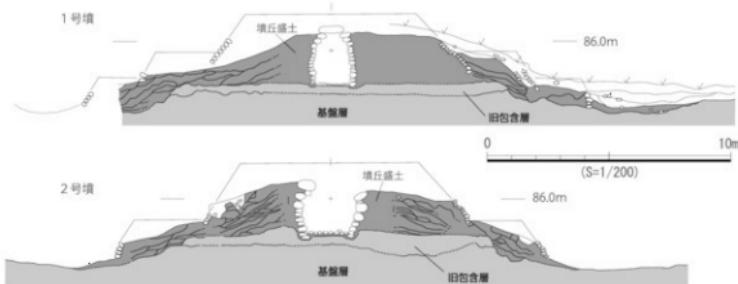


図66 稲荷塚1・2号墳 墳丘断面実測図（報告書図版を再トレース、一部改変）

梅替古墳の主体部は、無袖式の横穴式石室（以下「無袖式」という）である。これまで美濃地域では、無袖式を片袖式や両袖式の畿内系横穴式石室よりも階層的に下位に位置づけ、小型の古墳に採用されるとされてきた⁵⁾。しかし、比較的規模の大きい梅替古墳が無袖式であることはその位置付けを再考する必要性を示唆する。そこで、美濃地域の6世紀前葉から中葉の円墳で、無袖式を有し、尾根上や丘陵頂部に単独で立地するもの（梅替古墳類似例）を表23に示した。

表23 梅替古墳類似例古墳一覧

古墳名	市町村	時期	立地	形態	段	墳丘規模	墳丘に関する石列等の有無	埋葬主体部（横穴式石室）	鏡	漆木唐	石室規模
梅替古墳	坂祝町	6C前葉	尾根上	單塚	2段	直径19.5m	○	無袖式	×	○	石室長8.64m 玄室高7.2m
神崎山古墳	可児市	6C前葉	尾根上	單塚	1段	直徑13m (復元値)	○	無袖式	×	○	石室長5.96m
北山3号墳	岐阜市	6C前葉	丘陵頂部	單塚	1段	直徑10.5m	○	無袖式 開口部石積み	×	○	石室長5m 玄室高4.3m
坂戸上野古墳	可児市	6C中葉	丘陵頂部	單塚	1段	長径18.4m 短径14.6m	×	無袖式	○	×	石室長5m 玄室高3.7m
杉原4号古墳 (稻荷山古墳)	富加町	6C中葉	丘陵頂部	單塚	1段	長径15.5m 短径11.0m	×	無袖式	○	×	石室長7.6m 玄室高3.3m
元三ヶ模1号墳	多治見市	6C中葉	尾根上	單塚	1段	直徑約10m	○	無袖式（洞張り） 開口部石積みか	○	×	石室長6.45m 玄室高4.52m
半ノ木岡古墳	各務原市	6C中葉	丘陵頂部	單塚	1段	直徑約10m	×	無袖式	○	○	石室長8.1m 玄室高6.2m

集成した古墳は、多治見市西部から岐阜市東部まで広がるが、大きく見て木曽川中流域に集中する。各地域の後期古墳の初現に近い段階にあたり、仮に群集墳の中にあれば拠点的な役割を果たしている古墳といえる。木曽川中流域の地域首長層の一部は、横穴式石室の導入にあたり、片袖式や両袖式の横穴式石室ではなく、無袖式を積極的に採用していることが特筆すべきことである。無袖式は、おそらくは北部九州系の竪穴系横口式石室を西三河地域や北陸地方を経由して美濃地域に導入してから、木曽川中流域で独自

に発展させ、美濃地域の在地的な石室形態をなすに至ったと考えられる。その中でも梅替古墳は、2段築成であることや葺石を敷設する点から、無袖式を有する古墳の中でも代表的な位置にあるといえる。また、排水溝を敷設する点からも階層の高さがうかがえる。半ノ木洞古墳（図67）の排水溝は、石室の内外で方向を変えることや石室入口床面に設置された石材の様相が梅替古墳と酷似している。表中の排水溝を有する古墳は、いずれも蓋石が検出されており、暗渠であった可能性が高い。

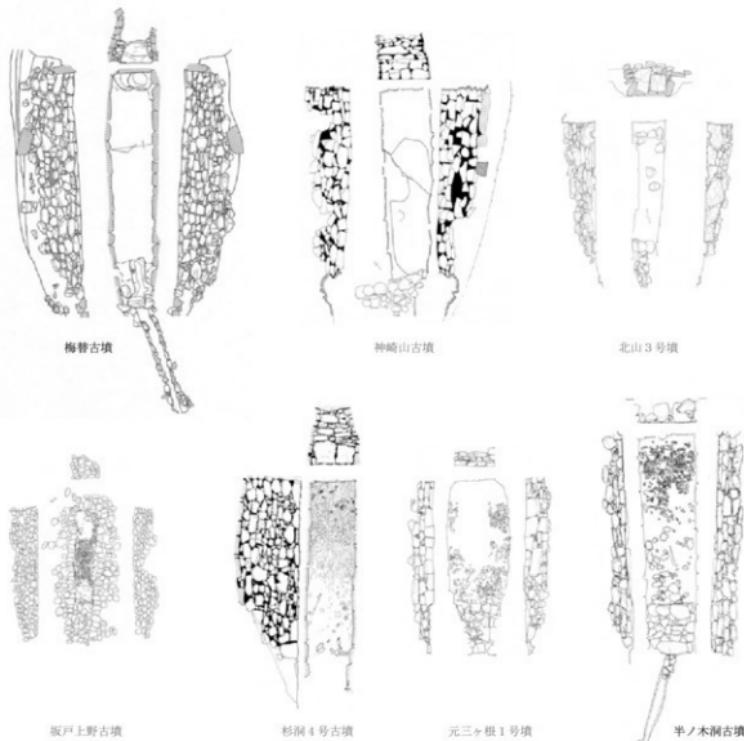


図67 梅替古墳類似例の石室実測図（1/180）（報告書図版を一部改変）

3まとめ

梅替古墳は、尾根上に単独で立地し、葺石を敷設した直径20m近い規模の2段築成の円墳に、排水溝を伴う無袖式の横穴式石室を備える点に大きな特徴がある。また、大型の須恵器甕を石室外で用いる葬送儀礼の痕跡も特殊といえる。これらの特徴をもつ古墳は、木曾川中流域において抽出することができ、この地域の後期古墳を特徴付ける一つの類型とみることができる。

直径 20m 近い規模の円墳は、6世紀前葉から中葉では周辺に見られない。また、2段築成で葺石を敷設するという特徴も同時期では類を見ないが、他の類似した古墳も含めて馬具が出土していないことから、大首長層の域までは達しない感がある。これらのことから、当古墳の被葬者は、6世紀前葉から中葉の前方後円墳である桑原野山1号墳（各務原市）、中切古墳（御嵩町）の被葬者の階層に次ぐ首長層、いわゆる群集墳の一般家父長層ではない有力家父長層^①であろう。

古墳の立地や石室の開口方向から、梅替古墳を造営した集團は、古墳の西側を強く意識したように思われる。眼下には、集團の主たる生産域と考えられる平坦地が展開し、平坦地の背後には半ノ木洞古墳が立地する各務原山地が生産域を画するように視界を遮る。その平坦地は加茂野台地の南縁辺部にあたり、弥生時代から古墳時代にかけての大規模集落である大杉遺跡（閖市）や東野遺跡（坂祝町）とも地形的につながっている。平坦地の南には木曾川が西へ流れおり、梅替古墳の位置は、木曾川の舟運と陸路で加茂野台地をつなぐ交通の要衝にあるともいえる。古墳を造営した集團が拠点としたであろう集落跡は、西側の平坦地に現在のところ認められていないが、今後発見される可能性は高い。一方、東野遺跡や大杉遺跡周辺の加茂野台地南部には、同時期の後期古墳が確認されておらず、当古墳の造営集團が、眼下の平坦地だけでなく加茂野台地南部を広く拠点とした可能性も考えられる。梅替古墳を造営した集團の様相や、有力家父長と考えられる首長層の性格や領域については、今後の梅替古墳周辺の調査に期待するところが大きい。

注

1) 須恵器の年代については、渡邊博人氏の御教示による。

渡邊博人 1996 「美濃の後期古墳出土須恵器の様相—蓋坏の型式設定とその編年試案—」『美濃の考古学』創刊号

2) 羽崎大洞4号墳（可児市）の菱形部、北山2号墳（各務原市）の埴丘裾部、鶴沼西町古墳（各務原市）の周溝から須恵器大型甕が出土している。石室入口、埴丘への登り口、テラス部に据えられていた状況を示すと考えられる。

可児市教育委員会 1985 『羽崎古墳群』

各務原市埋蔵文化財調査センター 2001 『北山古墳群発掘調査報告書』

各務原市埋蔵文化財調査センター 2003 『鶴沼西町古墳発掘調査報告書』

3) 6世紀前半から中葉の群集墳には二又古墳群（大垣市）、船来山古墳群（本巣市）、上城田寺古墳群（岐阜市）、西洞山古墳群（各務原市）、羽崎古墳群（可児市）などがある。

4) 可児市教育委員会 1994 『川合遺跡群』

5) 成瀬氏は、6世紀初頭、群集墳の拠点墳として畿内系片袖式石室が築造され、群集墳内の格差をもたせるために無袖式が格下の石室形態として導入されたことを示している。6世紀中葉前後には大型両袖式石室が大首長層に採用されるとしている。

成瀬正勝 2001 「横穴式石室の導入」『美濃・飛騨の古墳とその社会』八賀晋編、同成社

6) 長瀬氏は川合古墳群の様相から3つのランクを指摘している。大型方墳の次郎兵衛塚1号墳を地域の首長とし、葺石を有する稲荷塚1・2号墳をムラ長・有力家父長とし、稲荷塚3号墳を一般家父長としている。

長瀬治義 2001 「東濃地方の後期古墳文化」『美濃・飛騨の古墳とその社会』八賀晋編、同成社

第3節 梅替古墳とその周辺の土地利用の変遷について

梅替古墳の発掘調査において、墳丘下で縄文時代早期の遺構を検出した。また、古墳築造以後の中世以降に当地を利用している状況が判明した。このことから、当遺跡が縄文時代から中近世まで断続的に利用されてきたことが明らかとなった。ここでは、当遺跡の土地利用の変遷について考察する。

縄文時代 墳丘下からはいくつかの遺構を検出したが、縄文時代と断定できる遺構はSL2、SK24の2基である。出土した炭化物の放射性炭素年代測定によって縄文時代早期に比定される（第3章5節及び第4章参照）。縄文時代の遺構は少ないものの、出土した縄文土器の時期が早期から前期にあたることから、断続的ながらも縄文時代早期から前期に当地を利用していたと考えられる。SL2はその形状や被熱痕の位置から煙道付炉穴である可能性が高い。煙道付炉穴が定住に伴うものなのか、狩猟・採集の場として短期間とどまつた痕跡なのかは不明である。

古墳時代 縄文時代中期から5世紀に至るまで出土遺物がみられないことから、当地を利用しない時期が長く続いたと考えられる。6世紀前葉、小高い場所にある当地を選択し、古墳が築造される。その後、1世紀にわたり追葬が行われる。初葬は石室内で壺類などの供獻土器を用いた祭祀が行われ、2回目の追葬ではテラスや墳頂部において、甕や脚付壺や器台を用いた祭祀が行われる。追葬は少なくとも4回行われたと考えられる。その時期は、6世紀中葉、6世紀後葉、6世紀末～7世紀初頭、7世紀中葉である（第5章第2節参照）。

中世以降 7世紀後葉から12世紀前半までの出土遺物がみられないことから、再び当地の利用が断絶したと考えられる。次に当地を利用するには中世に入つてからである。梅替古墳周辺からは多くの山茶碗が出土する。山茶碗の時期ごとの出土量には2つのピークがある。1つは尾張5型式併行期であり、もう1つは大畠大洞4号窯式期～脇之島3号窯式期である。図68でそれぞれの出土位置を示した。前者の出土位置が石室から墓道にかけてであることから、盃掘または石室を二次利用したのはこの時期の可能性がある。周溝埋土下層からも窯洞1号窯式期の山茶碗（126）が出土していることから、13世紀前半までII層の堆積が進んでいなかつたと考えられる。もう1つのピークである後者の出土位置は、墳丘の南斜面に広がる。墳頂部が現地形で平坦であったことから、墳頂部が何らかの形で利用されるのに伴つて、斜面に廃棄されたものである可能性がある。そのため、墳頂部の改変、石室の埋没はこの時期であると考えられる。この時期にはSK11など墓坑と考えられる遺構を検出していることから、墳丘の南西部は墓域として利用されたと考えられる。後者の山茶碗の示す14世紀代は、当地域に見城寺（1539～）¹⁾が建造される1世紀前の時期にあたる（第2章第2節参照）。当地に見城寺があつたとされてきたが、16世紀以降の遺物は出土しなかつたため、伝承にある見城寺と当地との関係を見出すことはできなかつた。見城寺の築造以前の時期に人为的な活動の痕跡が認められることから、前身寺院があつた可能性は残る。墳丘南西部は、SW1から寛永通寶含む六道鏡が出土したことから、近世にも墓域として利用されていた可能性がある。また、横穴状のSK3は掘られた時期は不明であるが、地域の民話²⁾として残つてゐる「ほら穴」であるならば、しばらく開口していたと考えられる。

注

1) 板祝村教育委員会編 1955『板祝村誌』

2) 「勝山の見城寺というところに、塚とよばれていた小高い丘」があり、「塚の近くにすんでいるおじいさん」が「金のニワトリ」見たときに小高い丘に「ほら穴」を見つけて掘り続けると、たたりにあひ、おじいさんが寝たきりになつてしまうという話である。

板祝町婦人学級民話の会 1982『金のニワトリ』『さかほぎのむかし話』板祝町教育委員会

- 尾張 5型式併行
- 大烟大洞 4号窯式
- 大洞東 1号窯式
- 膽之島 3号窯式

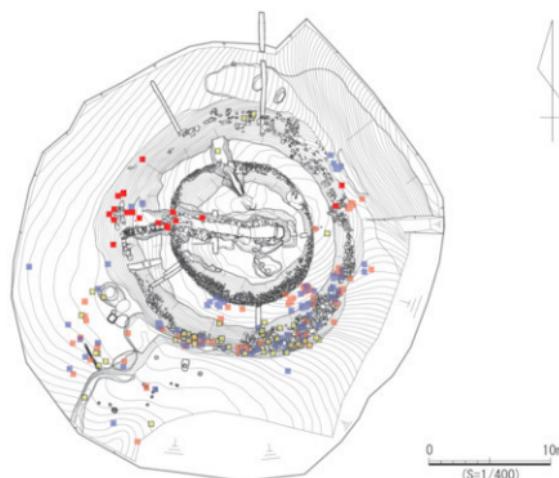


図68 時期別山茶碗出土状況図

参考文献

- 小濱学 2003『煙道付炉穴及び炉穴に関する一考察』『関西縄文時代の集落・墓地と生業』関西縄文論集1 関西縄文文化研究会編、六一書房
- 各務原市教育委員会 1987『半ノ木洞古墳発掘調査報告書』
- 各務原市教育委員会 1987『桑原野山1号古墳発掘調査報告書』
- 各務原市埋蔵文化財調査センター 1991『西洞山古墳群発掘調査報告書』
- 各務原市埋蔵文化財調査センター 2001『北山古墳群発掘調査報告書』
- 各務原市埋蔵文化財調査センター 2003『鶴沼西町古墳発掘調査報告書』
- 可児町教育委員会 1976『可児町神崎山古墳発掘調査報告書』
- 可児市教育委員会 1985『羽崎古墳群』
- 可児市教育委員会 1994『川合遺跡群』
- 可児市教育委員会 2005『可児市史 第1巻通史編考古・文化財』
- 可児市教育委員会 2014『坂戸上野遺跡・古墳発掘調査報告書』
- 菊川町教育委員会 1999『横地城跡総合調査報告書』
- 木戸雅寿 1982『草戸千軒町遺跡出土の石鍋』『草戸千軒 No. 112』広島県草戸千軒町遺跡調査研究所

- 岐阜県教育委員会 2004『岐阜県中世城館跡総合調査報告書第3集（可茂地区・東濃地区）』
- 岐阜県文化財保護センター 2013『今渡遺跡』
- 岐阜市教育委員会 1993『上城田寺古墳群』
- 小林達雄編 2008『總覽繩文土器』アム・プロモーション
- 斎藤孝正 1995「猿投・美濃・美濃須衛窯編年と他窯編年対比表」『須恵器修正図録 第3巻 東日本編I』
- 財団法人岐阜県文化財保護センター 1992『元三ヶ根古墳群・白土原9・10号古窯跡』
- 財団法人岐阜県文化財保護センター 2000『上原遺跡』
- 財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター 2007『東野遺跡』
- 財団法人岐阜市教育文化振興事業団 1998『岐阜市北山3号墳』
- 坂祝村教育委員会編 1955『坂祝村誌』
- 坂祝町教育委員会・岐阜県・建設省 1988『芦戸遺跡——級河川木曾川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘報告書一』
- 坂祝町教育委員会 2002『坂祝町史 自然編』
- 坂祝町教育委員会 2005『坂祝町史 通史編』
- 関市教育委員会 1976『陽徳寺裏山古墳群』
- 第8回東海考古学フォーラム 2001『東海の後期古墳を考える』
- 田辺昭三 1982『須恵器大成』角川書店
- 中世土器研究会編 1995『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社
- 土生田純之 2003『横穴式古墳構築過程の復元』『古墳構築の復元的研究』雄山閣
- 徳田誠志 1992『古墳時代前期末の二古墳—岐阜県行基寺・前山古墳をめぐって—』『肝陵・関西大学博物館学課程創設三十周年記念特集』
- 富加村教育委員会 1970『富加村の古墳』
- 永井久美男編 1994『中世の出土銭』兵庫埋銭調査会
- 永井久美男編 1998『近世の出土銭II』兵庫埋銭調査会
- 長瀬治義 2001『東濃地方の後期古墳文化』『美濃・飛騨の古墳とその社会』八賀晋編、同成社
- 中野晴久 1995『生産地における編年について』『常滑焼と中世社会』小学館
- 成瀬正勝 1992『美濃の横穴式石室』『美濃の後期古墳』美濃古墳文化研究会
- 成瀬正勝 1999『美濃における横穴式石室の構築方法一側壁の積石技法を中心に—』『岐阜史学—考古・古代特集—』第96号 岐阜史学会
- 成瀬正勝 2001『横穴式石室の導入』『美濃・飛騨の古墳とその社会』八賀晋編、同成社
- 萩原町教育委員会 1993『的場遺跡』
- 藤澤良祐 1994『山茶碗研究の現状と課題』『研究紀要』第3号 三重県文化財保護センター
- 横幕大祐 1997『いわゆる外護列石について』『美濃の考古学』第2号
- 渡邊博人 1996『美濃の後期古墳出土須恵器の様相—蓋坏の型式設定とその編年試案—』『美濃の考古学』創刊号

写 真 図 版

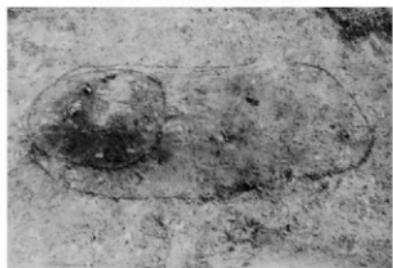
図版1



SL 2 壱化物検出状況（東から）



SL 2 完掘状況（西から）



SK24 検出状況（北から）



SK24 土層断面（北から）



墳丘検出状況（南から）



填丘完掘状況（南西から）



填丘完掘状況（南東から）

図版3



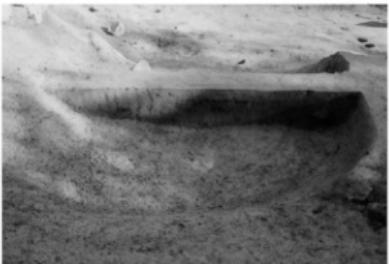
墳丘完掘状況（東から）



墳丘完掘状況（西から）



填丘東側周溝土層断面（北から）



填丘南西側周溝土層断面（西から）



填丘北側2段目葺石基底石検出状況（北東から）



填丘東側2段目葺石基底石検出状況（北から）



填丘西侧2段目葺石基底石検出状況（南から）



天井石検出状況（西から）



石室内部（西から）



石室奥壁（西から）



石室右側側壁（北西から）



石室右側側壁（北から）



石室全景（西から）



石室全景（東から）



石室基底石検出状況（西から）



石室掘方完掘状況（西から）



排水溝検出状況（西から）



排水溝蓋石除去後（西から）



填丘南側土層断面（東から）



填丘北側土層断面（西から）



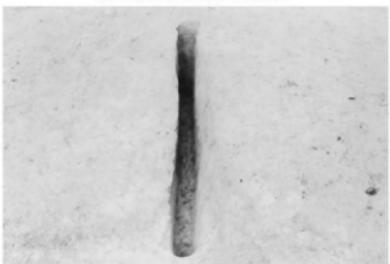
填丘東側土層断面（南から）



填丘西側土層断面（北から）



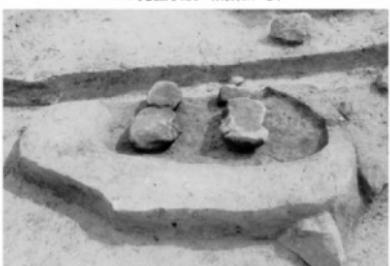
鍛錬車出土状況（南西から）



SD 3 完掘状況（南東から）



SW 1 検出状況（南西から）



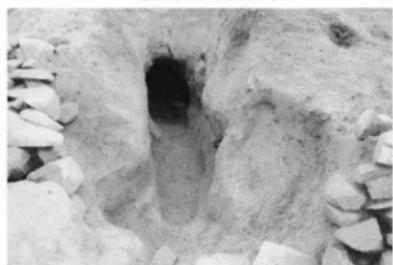
SL 1 完掘状況（西から）



SK 3 検出状況（北西から）



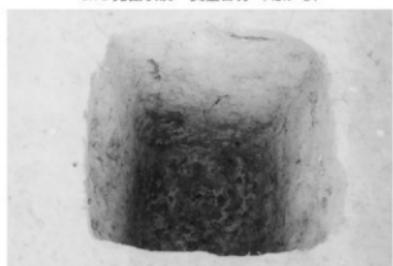
SK 3 完掘状況（北から）



SK 3 完掘状況・奥壁部分（北から）



SK 5 碓検出状況（西から）



SK 7 完掘状況（南から）



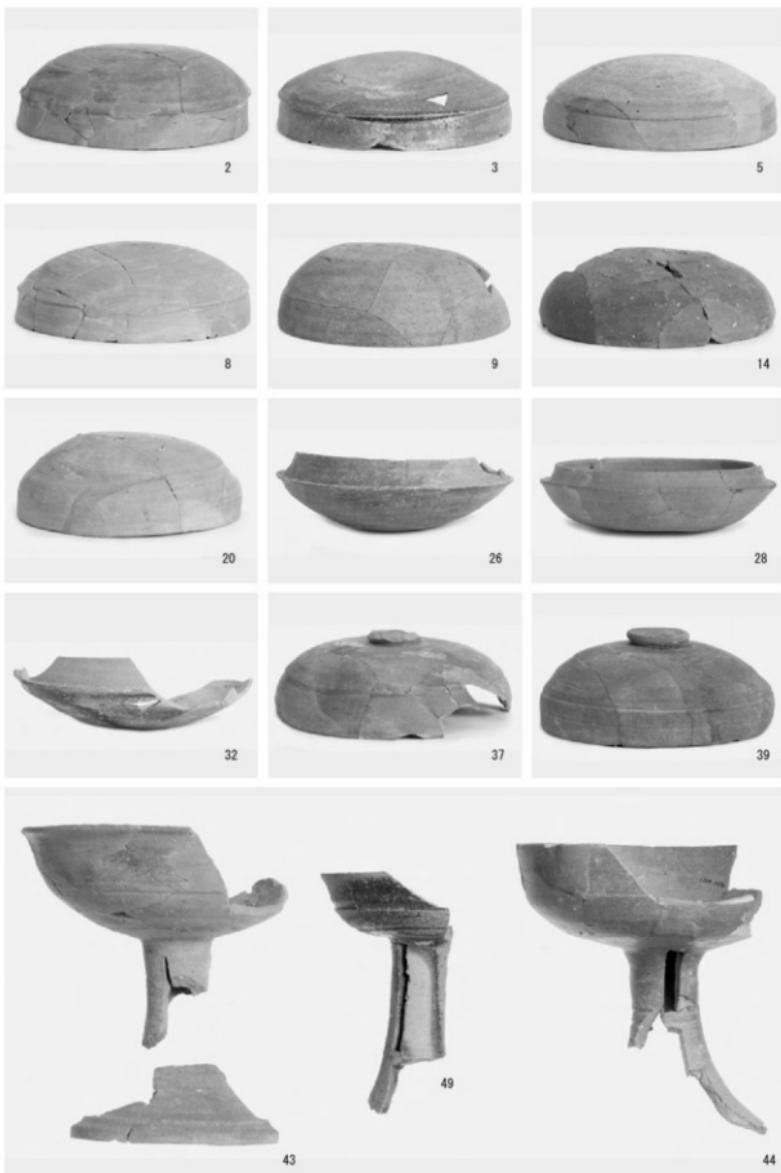
SK 10 碓検出状況（北西から）

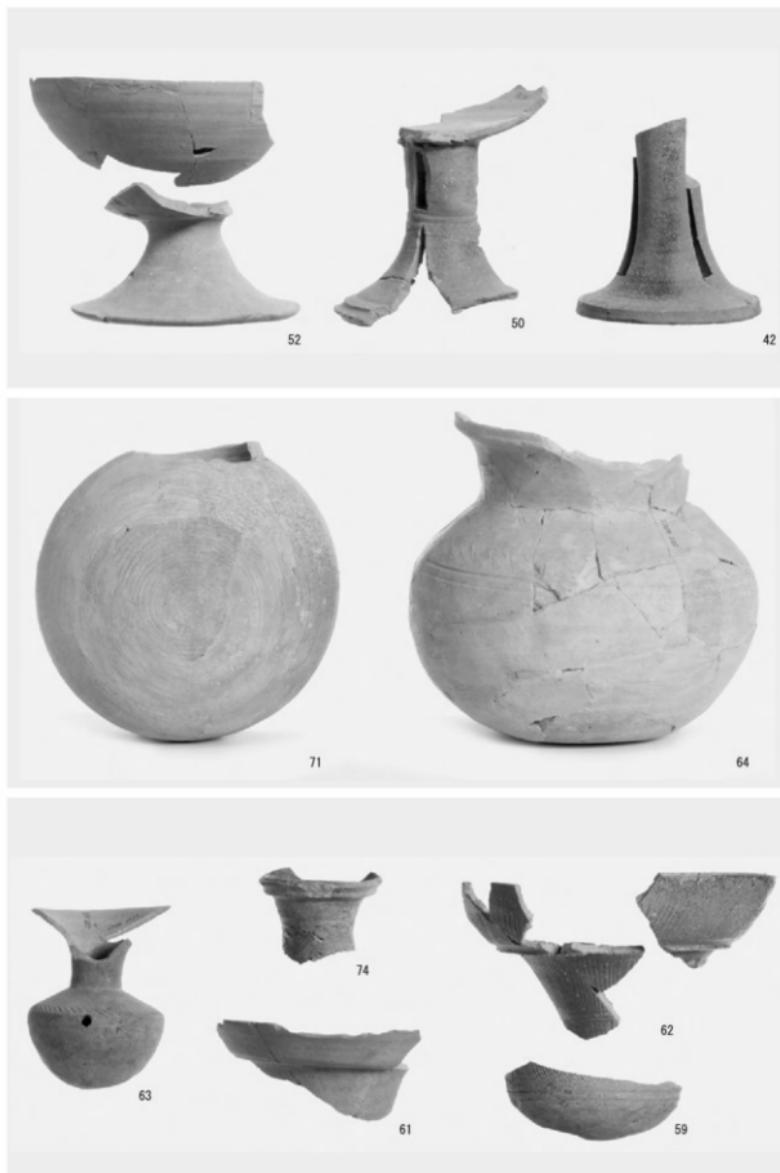


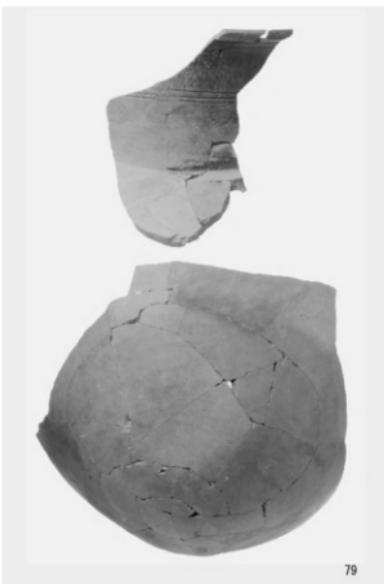
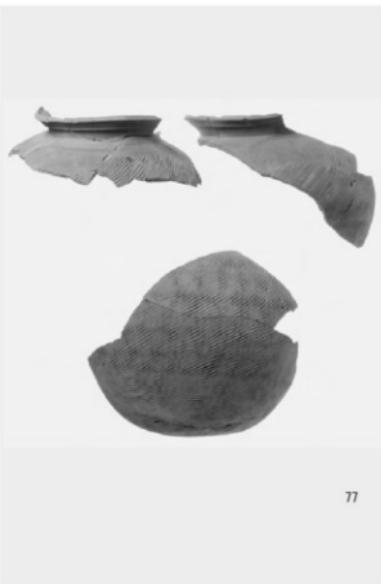
SK 11 碓検出状況（西から）



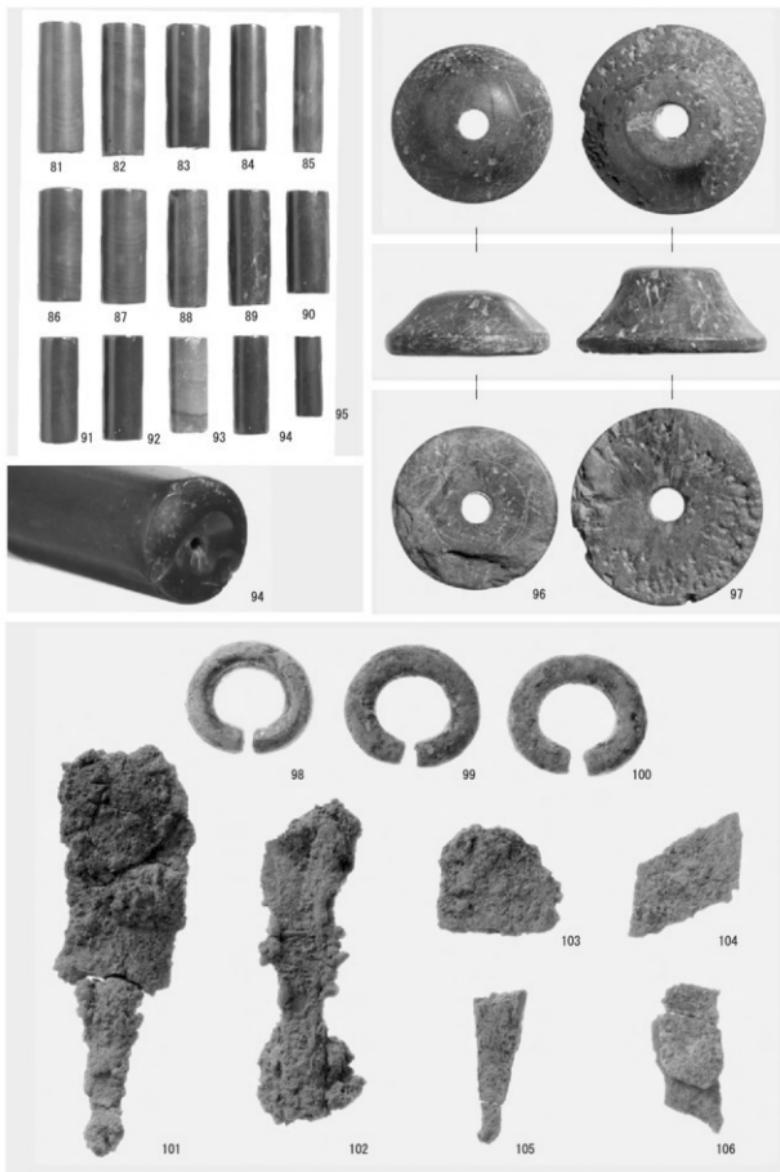
SD4 以東の削平平坦面（南西から）

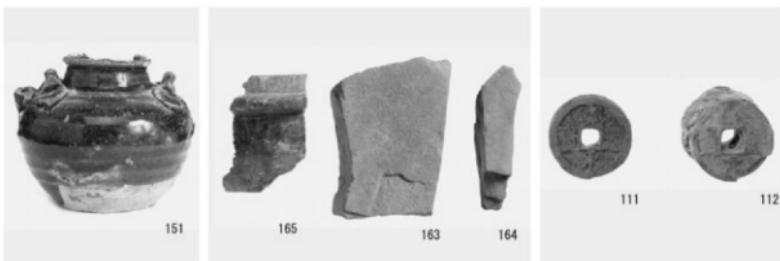
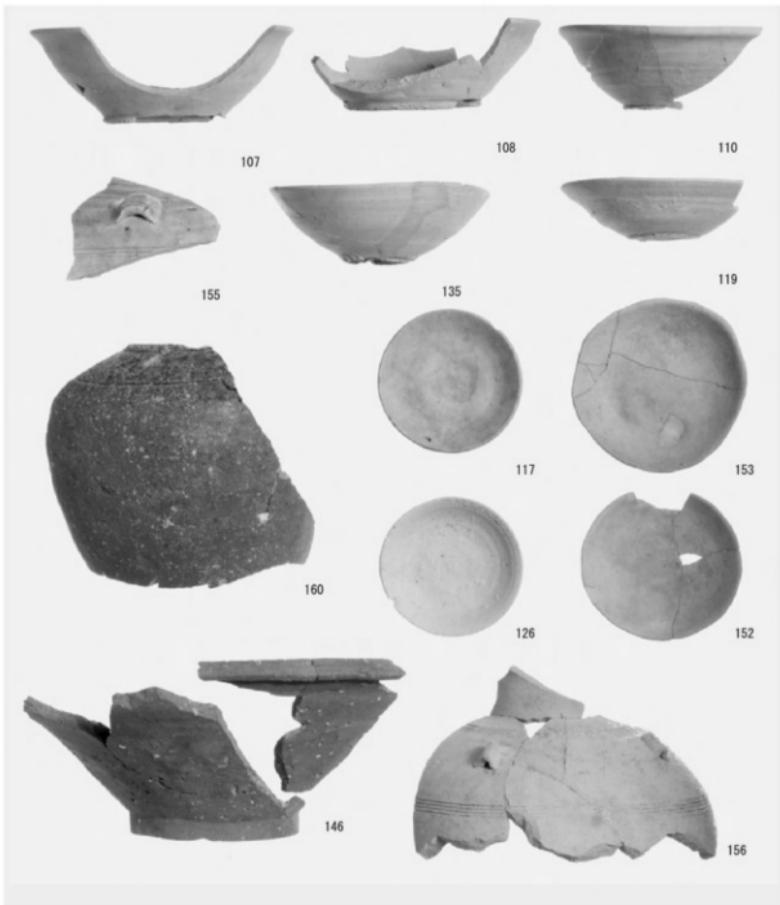




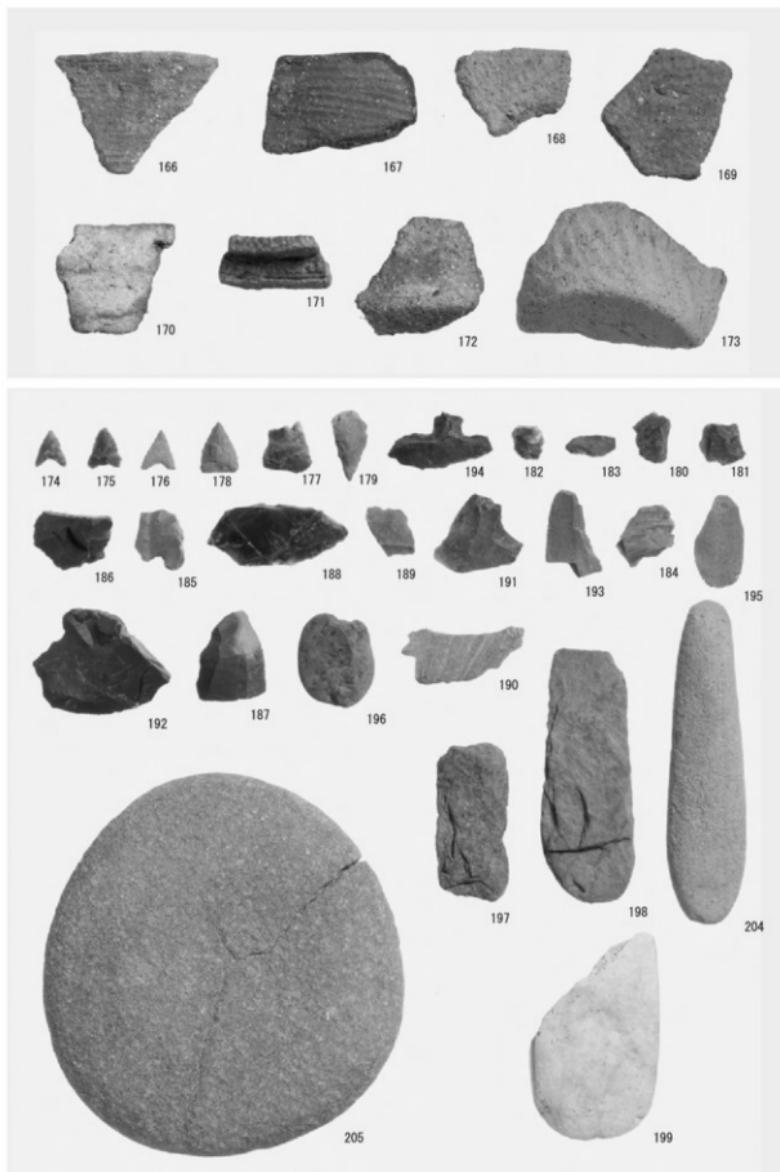


図版 11





図版 13



報 告 書 抄 錄

岐阜県文化財保護センター調査報告書 第135集

梅替古墳

2015年12月21日

編集・発行 岐阜県文化財保護センター

岐阜市三田洞東1-26-1

印 刷 株式会社もとすいんさつ